

## 〔第19回大会公開講演要旨〕

## 論理と体験と

— ヤスパーズの包括者論をめぐって —

福井 一 光

一般に「包括者」(das Umgreifende) という哲学用語は、ヤスパーズの『理性と実存』より本格的に使用されるようになる概念といわれ、特にこの包括者論の展開、及びこれと深い関係に立つ理性論の展開をもって、彼の哲学を前期哲学から後期哲学に分けるという整理のつけ方が用いられている。しかし、こうした一般的理解に異議を称える見解も、むしろヤスパーズを専門とする研究者の間から、却ってヤスパーズの文献に詳しいが故に披瀝されることも、少なからずある。こうした人士は、例えば『哲学』(3巻本)に現れた“umgreifenden”や“übergreifenden”や“umfassenden”という言葉の使用例や、『運命と意志』の中で「包括的なるもの」を暗示する海の事例等をもって、ヤスパーズが前期から包括者論を発想していたといった議論を展開する。また、該博な知識を有する人士ほど、果ては『華嚴経』の海の記述等を引き合いに出して、あたかも仏教と彼の包括者論が同一であるかの如き主張を口にする。

しかし、包括者論を議論する場合、少なくとも、a. 論理との関係、b. 理性との関係、そして c. 超越者との関係を議論することは、欠くべからざる要点であると同時に、彼の包括者論は、やはりキリスト教と近代哲学の伝統の中で考えられたものであり、その諸点を考察の埒外において、若干の言葉の使用例や個人的な体験の例を引き合いに出してこの問題を論じ切るのは、ある種の危うさがつきまとうように思う。因みに、ヤスパーズと似たような海への直観であれば、華嚴経を始めとする、比較的容易く散見出来る仏教のみならずウォルター・ペイターの文学やイスラーム神秘主義の文献の中にも捜すことが出来る。

さて、全てにわたって取り扱う講演時間上の余裕がなかったので、論理の問

題と超越者の問題にしぼって、ヤスパーズの包括者論の独自性について際立たせてみるのが、今回の講演の主題であった。

ヤスパーズが包括者論を説くに至る理由には、一つ論理の問題がある。しかし、これについての彼の記述は、終始、現存在・意識一般・精神・実存・世界・超越者といった概念を用いて、その関係構造をかなり対比的乃至図式的に説明する傾向が強いところから、こうした概念を用いて説明しようとするヤスパーズの意図は、承服出来るものの、その論証の仕方については、以前から私は、相当不満があり、もう少しこれらの諸相の内面的連関というか、これを私たち「人間（実存）の経験の諸相」として詳らかにする必要があると考えてきた。また、彼が『理性と実存』以降、包括者という絶対者に対する概念を新たに獲得したにも拘わらず、何故最後まで超越者という絶対者に対する概念を廃棄しようとしなかったのか、その独自性こそ、体験に根差した彼の哲学の現実観と真骨頂があり、こうした考察から、彼の包括者論が哲学史上単なる一元論でも、また多元論でもない、現象に対して常に開きつつ、その諸現象を統合する原理を何とか見出そうとする可能性をもった思索であることを指摘しようとした。最後に、こうした議論から、das Umgreifende の訳語としては、「包越者」ではなく「包括者」が適当であることを論証しようとした。

なお、本講演の中心的部分は、『理想』（671号／2003年8月25日発行）に誌上発表されている。

（鎌倉女子大学教授）